

ケアマネジャーが起点となる 「まちづくり」へのチャレンジ ～町田から、私たちの手で未来のまちづくりを～

執筆 ▶ 長谷川昌之 よつばケアプラン 管理者、よつばの福祉用具 所長
町田市ケアマネジャー連絡会 会長
主任介護支援専門員、福祉用具専門相談員

まちづくり、地域づくり。この言葉を聞いたときの、ケアマネジャーの反応は千差万別ではないだろうか。担当件数の増加で、日々の業務だけで精一杯という声も少なくない。一方で、まちづくりにより地域のケアの受け皿が広がり、ケアマネジメントの質が上がったという声も聞かれる。そこで、東京・町田市で精力的に地域に関わり続けている主任ケアマネジャーの長谷川昌之さんが、「ケアマネジャーだからこそ」できるまちづくりの実践と、その効果を詳説する。

はじめに なぜ今、私たちケアマネジャーが「まちづくり」の主役なのか

日々の限られた時間の中で、目の前の一人ひとりの生活を支えるために奔走されているケアマネジャー、そして地域を牽引する主任ケアマネジャーの皆さん、本当にお疲れ様です。

現在、私たちを取り巻く環境は、介護報酬改定への対応や業務の複雑化、物価高騰、そして深刻な人材不足、ハラスメントへの対応など、依然として厳しい状況が続いています。日々の書類作成や調整業務に追われ、目の前の利用者さんへの対応だけで精一杯になっている方も少なくないのではないのでしょうか。

私たちが毎日行っているインテーク、アセスメント、そしてケアプランの作成。

これらはすべて、目の前の利用者さんの「一人の生活」を支え、その人らしい生活を組み立てるための個別支援です。

しかし、少しだけ視野を広げてみてください。私たちが日々向き合っている「一人の困りごと」や「人生の物語」の背景には、必ずその人が暮らす「地域社会」が存在しています。

「もっと早くから自分の人生の終わり方について家族と話せていたら」

「認知症になっても、お気に入りのカフェに気兼ねなく通い続けられたら」

「医療との壁を感じて、最期を自宅で迎えたいという願いを諦めざるを得なかったら」

これらの課題は、果たして個人の努力や、一つの事業所のケアプランだけで解決できるのでしょうか。答えは、決

してそうではありません。個別支援を積み重ねる中で、私たちが直面する「制度の隙間」や「地域資源の不足」こそが、次に私たちに取り組むべき「地域づくり・まちづくり」の種にほかなりません。

私たちケアマネジャーは、単なる「サービスの配分係」ではありません。もし私たちの仕事は、既存の制度を一律に当てはめるだけの作業になってしまっているなら、そこは地域包括ケアのゴールではなく、新たな「地域づくりの起点」として捉え直すべきです。

制度ではなく生活を見つめ、私たちの気づきから新しい地域資源が生まれるとき、ケアマネジャーはまちづくりを動かす「原動力」へと役割を広げていきます。生活される方の最も近くに寄り添い、地域のリアルな課題を誰よりも早く、深くキャッチできる立場にある私たちだ